

## 18 世紀スコットランド学会 / 国際アダム・スミス学会 合同大会（2013 年 7 月 3 日-6 日）に参加して

有 江 大 介

### 1

「スコットランド，ヨーロッパ，帝国—アダム・スミスの時代とその後」という幅広いテーマで開かれた今回の合同大会の会場は，セヌ川からサン・ミッシェル大通りをゆっくりとしばらく上って左に入った，第 5 区のほぼ中心に位置する，カルチェ・ラタンにある古い由緒ある建物でした。つまり，1971 年，パリ大学が 13 の大学に再編成され，パリ第 1 大学「バンテオン・ソルボンヌ」，パリ第 3 大学「ソルボンヌ・ヌーベル」，パリ第 4 大学「パリ・ソルボンヌ」とそれぞれソルボンヌの名を冠するようになりましたが，人文と語学が中心で，ソルボンヌといえばその建物自体を指すといわれる第 4 大学が会場だったのです。もっとも，2010 年に 13 あるパリ大学のうちいくつかがナンバーを廃止するなどの名称変更を行ったので，その後の各パリ大学の現在の正確な名前には筆者は通じていません。

なぜ，こうした観光ガイドのようなことから本報告を始めるかという点，やはり今回の場所が報告の分野の幅広さと，前年の 12 月末には応募が予定数に達するという，実質的な締め切りが他の同系統の学会のケースに比して極めて早かった事に示されるある種の人気の高さに関係していると思われるからです。筆者自身，かなり遅くなったとはいえ，「アダム・スミスの認識論」というアブストラクトを送ったところ，報告は既に満杯で代わりに経済系パネルの司会をやって欲しいという返事もらった次第です。

もちろん，大会プログラムを見る限り，思想史，社会史，経済史，政治哲学，倫理学，神学，心理学，音楽，建築学そして貿易論など，非常に幅広い領域からの参加が特徴でした。これは，もちろん，筆者もメンバーである 18 世紀スコットランド学会（Eighteenth-Century Scottish Studies Society: ECSSS）と国際アダム・スミス学会（International Adam Smith Society: IASS）との共催大会である事による面も大きいと思います。学会の性格から，全体として歴史学，哲学の領域の報告が多いことは当然ではありますが，ECSSS 単独の場合に比べると，経済的，社会科学的な報告が増加していると言えましょう。

その上で，今回の大会の印象を一言で言うと，“雑然としていて何でもあり”というものでした。これは，一面で，特に英語圏における現在のスミス研究の広がり多様さを反映するものとは言

えます。しかし、他面で、かつて I. Hont and M. Ignatieff, *Wealth and Virtue: The Shaping of Political Economy in the Scottish Enlightenment* (1983) や R. Sher, *Church and University in the Scottish Enlightenment: The Moderate Literati of Edinburgh* (1985) の登場と相まって、Q. スキナー流のコンテクスチュアリズム（文脈主義）を通奏低音とするシヴィック・パラダイムがスコットランド啓蒙とスミス研究の1つの統一した流れを作るかに見えた時代を経験したものにとっては、隔世の感を否めなかったというのが正直なところです。『アダム・スミス伝』のI. ロスは登場したものの、長年、ECSSSの事務局長を務めているシャー教授が大会の最初のどこかの場面で、3カ月ほど前の2013年3月29日に亡くなった故ホント教授に追悼の言葉を述べていたのが、この間の研究状況の変化を象徴する出来事のようにも思えました。

## 2

さて、本合同大会のそのものについて触れましょう。大会プログラムによれば、総会講演3名、一般パネル報告86名、パネル司会のみ17名、聴講9名の計115名の参加でした。うち、研究対象から当然とはいえ、英語圏からは77名（アメリカ30名、スコットランド25名、カナダ10名、イングランド8名、アイルランド2名、オーストラリア2名）と大多数で、残りが14名参加のフランスに加え、他のヨーロッパ9カ国、それに、トルコ、日本、韓国、台湾、南米、中東など、総計で24の国と地域から出席がありました。ちなみに、日本からの参加者は5名で、“Adam Smith and the Strategy of Commerce”を報告した野原慎司氏（現・東京大学）、Smith and the Problem of Commerceのパネル司会で坂本達哉氏（慶應義塾大学）、同じくThe Smithian Legacyのパネル司会で筆者・有江、そして聴講の新村聡氏（岡山大学）と谷田利文氏（パリ大学西校、旧第10大学ナンテール）でした。これは何とか韓国（3名）を越えたものの、私自身もヒュームの宗教批判を報告し、別に「スコットランド・ポリティカル・エコノミー研究に関する日本の伝統」という特別パネルまであったジョージ・メイスン大学で開催されたこの両学会の合同大会（ワシントン、2001）に10名を超える参加を見たことを考えれば、いささかの寂しさを感じざるを得ません。わが国におけるスコットランド啓蒙とアダム・スミス研究者の高齢化と後に続く世代のリクルートに失敗しつつあるという、日本経済学史学会や他の人文・社会系学会が共通して抱える問題がここにも現れていると思います。

次に、内容的な傾向を3本の総会講演（Plenary Lecture: PL）の題目から見ていきましょう。

PL 1: Emma Rothschild (Harvard U.), “Overseas at Home: France and Scotland in the Eighteenth Century” (7月3日)

PL 2: Michael Biziou (U. of Nice), “Kant and Smith as Critics of Hume’s Theory of Justice: Property, Poverty, and Redistribution of Wealth” (7月5日)

PL 3: Amartya Sen (Harvard U.), “On Smith’s and Hume’s Critique of Imperialism” (7月6日)

大会初日の冒頭に行われたロスチャイルドの講演（PL 1）は、徹底して個別・具体的な歴史事象に定位・内在して歴史を描く、語るという社会史から科学史に至るまで近年流行のマイクロヒ

ストーリーからの問題提起でした。高尚な古典の読解に依拠して「全体」や「構造」を示そうといった従来のいわば“大きな物語”ではなく、7年戦争という事態の文脈の中で、ある個別の実際の一般家族や普通の人物がどのようにフランスとスコットランドという2つの国の国境を越えたのかを紡ぎ出し、そうした昨日、今日、明日の細部の事実とその集積こそが時代の具体的な実態に他ならず、歴史そのものということになります。わが国のある世代以上の方々は、“細部への愛着”と自覚的なヘーゲル=マルクス流の歴史法則主義批判を目指したアナール学派や、Q. スキナー流の相対主義的な歴史方法論であるコンテクスチュアリズム（文脈主義）を思い起こすに違いありません。

2番目の総会講演（PL2）は、『道徳感情論』の現代フランス語訳者の一人であり（初版1999、再版2003）、近年のフランスで18世紀啓蒙、スコットランド啓蒙について最も精力的に労作を發表している研究者の一人、ビジウによるスミスのヒューム批判を中心とした報告でした。彼は言葉の端々に、現在の市場原理主義的な経済活動の帰結が富の分配の不平等と貧困とを生み出しているが、その淵源がスミスにあると考えられているのは誤りであることを強調します。『アダム・スミスと自由主義の原点』（パリ、2004）で既に示していた、スミスの自然的自由のシステムが円滑に機能する際に厳しい道徳と政治的理想がそれにともなうことによって結果的に公共の利益が志向されるという趣旨が再論されているように見えました。この点から、ヒューム正義論中の功利主義的要素を捉えて批判するスミスを見出し、さらにそれをカントに繋げていたように聞こえました。非常に現代的関心からのスミス、ヒューム、カントの正義論の解釈に思われます。

第3の総会講演は、ノーベル経済学賞の理論家アマーティア・センによるものでした。センは、自らのインドでの生活体験から語り起こし、そこで見られた所得分配の不平等や貧困をどのようにして解決すべきなのかを、自身の著作で展開した『正義のアイディア』（原著2009：邦訳、明石書店、2011）をベースに示そうとしていました。その際に、一国内に留まると彼流に解釈したヒュームやスミスの正義論を、国境を越えて機能する正義論へと拡張することによってそれをグローバルイズムや帝国主義批判の武器とすることを目指しているようでした。このとき、センのこうした解釈の方向には自然法学も共和主義もシヴィック・パラダイムもなく、あたかも『道徳感情論』や『国富論』が3週間前に出版されたかのような読み方で、固有のスミス研究、スコットランド啓蒙研究からするとセンの主張の当否を考える前に大きな違和感を持たざるを得ません。方法的には、同日午前中のセンを討論の中心にして3人の討論者を置いたパネル“Reinterpreting Smith: New Controversies”での議論を参照すべきでしょう。特に、3人目のジラルド・ネ氏の批判が日本の研究者にはわかりやすい例と思います（M. Gilardone, “Amartya Sen’s Free Use of Adam Smith’s Impartial Spectator: Strength or Weakness”）。要は、勝手に読み込むな、ということですが、私の聞き取ったそのエッセンスは次のようなものです。センにとって拡張されるべき正義の基軸はスミスの観測者（spectator）論にあるが、センは公平な観測者の行う判断を生身の人間の規範的（normative）な集団選択と解釈する。しかし、スミスの観測者は、立場の違いを越えた判断に収斂しうる共通に承認された信念の発展を代表する想像上の人物（an imaginary figure which rep-

represents the evolution of common agreed belief と聞き取った)であって、それが示される『道徳感情論』はあくまでも個々の主体 (agent) の感覚と経験のみに依拠する実証的 (positive) な論述である。impartial といってもセンはそこにスミスと違って理論性に加えて強い規範性を読み込んでいる。スミスと違うというこのような批判に対して、センの答えは、スミスが本当は何を考えていたのかは誰にもわからないのだから、自分はスミスの示した理論をどのように現実に適用するかを考えるだけである、というものでした。

以下、上記以外に筆者が聞いたパネルの個別報告のうち、面白いと思ったものだけ参考までに紹介しておきます。

- ・ Thomas Ahnert (U. of Edinburgh), “Seventeenth-Century Augustinianism and the Intellectual Origins of the Moderate Party.”
- ・ Alasdair Raffe (Northumbria U.), “George Sinclair and the Reception of New Philosophies in Scotland, c. 1660–1700.”
- ・ Christel Fricke (U. of Oslo), “Jean-Jacques Rousseau and Adam Smith on Virtue and Moral Education under Conditions of a Commercial Society.”
- ・ Remy Debes (U. of Memphis), “The Limits of Humanity: Valuing Persons When Benevolence Runs Out.”
- ・ Gordon Graham (Princeton Theological Seminary), “Adam Smith and the Science of Man.”
- ・ Laszlo Kontler (Central European U.), “‘Progressive Revolution’: History and Protestant Theology in the Scottish and German Enlightenment.”
- ・ Joel Sodano (State U. of New York at Albany), “Francis Hutcheson’s Moral Philosophy and the Modern Conception of Happiness.”

### 3

全体としての感想を最後に挙げておきます。第1に、現実の問題、特に貧困や福祉や幸福、所得分配や戦争に触発されて、そのこととの関連でスミスやスコットランド啓蒙のさまざまな検討課題に取り組んでいるように見える報告が、少なくともこの分野のわが国よりは多いのではないのでしょうか。それらに関わるこの紙幅では紹介できなかった多くの報告があります。

第2に、センはグランドセオリーを正面から創出しようとしているように見える一方で、彼我の学界状況の違いとして、一定の地歩を固めているように見えるマイクロヒストリーに関してわが国の学史研究ではどのように考えるのか、学史学会としても何らかのコメントが必要と思いました。

第3に、センのパネルや総会講演の際に見られたように、多数派の人文的歴史家と理論家、特に経済理論家とは本当に内在的な議論ができるのかという、両陣営の関心の持ち方の乖離を強く感じました。これは、今の日本経済学史学会にもかなり言えることなのではないのでしょうか。

第4に、雑多なアプローチとはいえ、わが国には絶えて久しい、スミス研究のエネルギーを感じました。第1の点とも関連しますが、英語圏でのスミスへの関心の増大は、多くの問題を

生み出していると言われる市場原理主義に代表される現代のアングロ・アメリカ的思惟の淵源の1つとしてスミスが顧みられているためではないでしょうか。このあたりを考慮してシンポジウムを開くなど、学史学会としてもわが国のスミス研究の再活性化のための工夫をしてはどうでしょうか。

第5に、やはり、わが国にはあまり見られないスコットランド啓蒙における宗教的背景についての報告が毎回のこととは言えある程度見られた点は、現在、日本ピューリタニズム学会会長にある筆者としては、わが国の研究状況との大きな違いとして言及しておきたくなります。

(有江大介：横浜国立大学大学院国際社会科学研究院)